

# 災害の少ない地域の学校と子どもたちの災害・防災意識

荻野貴大

## 1. はじめに

日本では、地震や水害など多様な災害が頻発しそれによる多大な被害が生じている。災害による被害を軽減するためには国民一人一人が災害を意識し、いざという時に備える取り組みをすることが最も有効な防災対策であり、そのため、防災教育の重要性は年々高まっている。内閣府中央防災会議「防災に関する人材育成・活用専門調査会」（2003）の報告では、「世界的にも有数の災害発生大国である我が国においては、災害時に関する知識や対処能力を子供の頃から身に付けておくことが、この国に居住し、生活していく上での必須の条件である」とし、「学校における防災教育を推進すべきである」と示している。そうした状況のもと平成 21 年度からは地域防災スクールモデル事業が展開されるなど、防災教育への注目は高まっているといえる。

また、文科省は防災教育の内容として「特に地震等の自然災害に関しては地域の自然や歴史などと深く関わる内容が多いので、各学校や地域の特性、実態を十分踏まえて防災教育の観点から重点を置くべき内容を検討する必要がある」としている。さらに小舘・田中（2012）では、過去に災害を受けた地域に居住しているが、その多くは直接的な被災経験を有していない特徴を持つ、札幌市の児童と保護者を対象者として意識調査を行い、その結果、親族に経験者がいることで防災への意識が高まっていたことを明らかにしている。

本調査地である山口県下関市は、気象庁地震データベースによる過去約 90 年間の地震発生状況において、震度 5 強以上の揺れが一回の身であり、全国的に見ても地震発生回数が非常に少ない。今後 30 年以内に震度 6 弱以上の揺れが起きる確率も 3.2% で全国トップ 10 に入る低さである。山口県企業立地ガイドで地震のリ

スクが少ない県全国 3 位と紹介され、「年間を通して気温差の少ない温暖な気候、そして山口県は地震発生頻度が相対的に少ないなど、安定した自然環境が整っています」（下関市、2004）と紹介する、災害、特に地震の少ない地域とされる。そのため児童の親世代やその上の世代も大きな災害を経験している可能性は低いと考えられる。

このような、地域全体で災害経験が少ない地域に立地する学校の防災教育への取り組み状況、居住児童の防災教育への認識を調査し、学校や児童への意識を明らかにすることは、全国的に防災教育の重要性が高まる中で、災害非常襲地域の防災教育を考える際に重要な資料を提示できる。このような問題意識のもと、本研究では下関市内の小学校及び児童への災害・防災意識についてのアンケート調査を行った。

## 2. 調査概要

### 2. 1. 防災教育アンケートの目的

自然災害の少ない地域に居住する児童が、災害をどう捉え、防災教育についてどう考えているのかを調査し、他地域での調査と比較することで、災害の少なさ及び学校教育が児童に与える影響を明らかにする。小舘・田中（2011）と此松・中北（2010）で行われたアンケート結果を比較対象とする。前者では札幌市内の 5・6 年生 178 名にアンケートを行っている。札幌市内の児童は、過去に災害を受けた地域に居住しているが、多くは直接的な被災経験を有していない。後者は、和歌山市内の児童 196 名を対象としたアンケートを行っている。和歌山市内の小学生の親世代は札幌市内より災害を経験した割合が高い。

また、学校を対象とした防災教育の取り組み

## 2. 2. 調査対象地域と調査方法



り、許可を得た学校には郵送又は直接手渡しで用紙を配布した。児童用アンケートは各学校に直接説明に行き、各学級担任を通じて児童に記入してもらった。答えづらいものは保護者の手助けのもと回答いただいた。アンケート設問内容について、学校へのアンケート内容は、全3部構成となっており、防災に関わる年間行事、各科目授業における防災教育の実施状況、学校の立地する地域での災害の危険性の認知度、避難訓練の実施状況等を問うた。児童用のアンケートは此松・中北(2010)を参考に作成した。内容は、自分自身について、災害について、家庭での防災について、学校での防災について問うており、主な質問項目は、被災経験、住んでいる地域の災害、防災マップの認知、家庭での災害に関する会話、避難訓練への気持ち、防災教育の必要性、受けた防災教育の内容などである。最後に自由記述を設けた。

児童に対する項目は、わかりやすいように項目をなるべく少なくし、理解しやすい言葉遣いにするとともに、漢字にはルビを振った。そのため児童でもこたえやすい容易な内容になっている（資料1）。

### ○比較対象

小舘・田中(2011)では札幌市内の5・6年生の178名に同様のアンケートを行い、札幌市内の児童は、過去に災害を受けた地域に居住しているが、多くは直接的な被災経験を有していないような特徴がある。此松・中北(2010)では、和歌山市内の児童196名を対象としている。その中で、和歌山市内の小学生は札幌市内の児童より親世代で災害を経験した割合が高いという特徴を示している。

表 1 想定災害認識

学校名	ハザードマップに基づく災害想定	学校認識
A	地震・斜面災害・高潮・津波	想定されていない
B	地震・斜面災害・高潮	斜面災害
C	地震・斜面災害・高潮・洪水	想定されていない
D	地震・斜面災害・高潮・津波	未回答
E	地震・斜面災害・高潮・津波・洪水	地震・斜面災害・高潮・津波
F	地震・斜面災害・高潮・津波	地震・斜面災害・高潮・津波
G	地震・斜面災害・高潮・津波・洪水	地震・津波
H	地震・斜面災害・高潮・津波	地震・斜面災害・高潮・津波
I	地震・斜面災害・高潮・津波	津波
J	地震・斜面災害・高潮・津波	地震・斜面災害
K	地震・斜面災害・高潮・津波	地震・斜面災害
L	地震（南海トラフ・菊川断層地震）・斜面災害・洪水	地震（南海トラフ）・斜面災害

### 3. 防災教育アンケート結果

#### 3. 1. 学校アンケート結果

**Q**、各科目授業における防災教育の実施状況  
 ここでは各科目の授業において防災教育を行っているか、また、行っているとしたらどのような内容を取り扱っているのかについて問うた。その結果、全 11 校の中で、ほとんどの学校で少なくとも 2 教科で実施しており、多い所では、国語、理科、社会、体育の 4 教科で実施する学校も見られた。一方で、理科の一教科のみで行っている学校も 1 校見られた。また、海岸の近くなど、学校立地地域の特性や、台風被害や津波などの起こりうる災害を想定した上で、台風や大雨時における備えや、津波や洪水に対する防災対策など、想定した災害に関わる内容の防災教育を行っている学校はわずか 3 校にとどまり、多くが教科書の内容をそのまま行うとの回答だった。

さらに、学校の立地地域についてどのような災害が想定されているか、その認識があるかを

問うた項目では、下関市が発行する各種ハザードマップと学校の立地を重ねながら、学校の回答結果を照らし合わせ、学校が「起こりうる災害」を想定しているかどうかを筆者が判断した（表 1）。学校立地地域の災害想定をすべて想定、認識している学校は、全 11 校中 2 校という状況であった。また、想定されているにも関わらず、想定されていないと回答した学校が 2 校あった。

#### 3. 2. 児童用アンケート結果

**Q**、自分の住んでいる地域は、災害が起こりやすい地域だと思うか（図 2）。

すべての学校で、ほとんどの児童が起きやすい地域だとは思わないと回答している。しかし、どの学校の児童の中にも、起きやすい地域だと思うと回答した児童が 10%ほど存在した。

**Q**、防災マップを知っているか（図 3）。

この項目では、防災マップの認知状況について

て、「知っていて、見たことがある」「知っているが、見たことはない」「知らない」の三つの項目に分けて質問した。「知っている」と「見たことがある」では認知の状況が異なってくるため、その点は分けて作成した。

全体として、知っているし見たことがある児童が 24%、知っているが見たことのない児童が 33%、知らない児童が 41%で、未回答が 2%であった。見たことがない児童も含め、知っていると答えた児童が 57%であった。

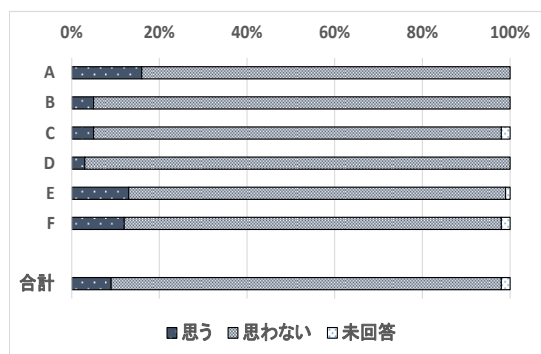


図 2 災害への児童の認識

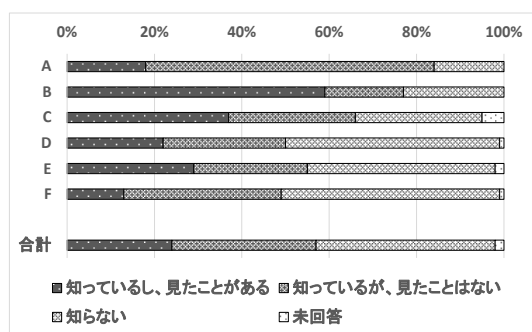


図 3 児童の防災マップの認知度

Q、家族で洪水や地震などの災害について話すことはあるか (図 4)。

この項目では、家庭での災害についての話題の頻度を明らかにするために問うた。学校ごとの差は大きくは見られない。全体として、話す児童が 46%と半分を切っている。

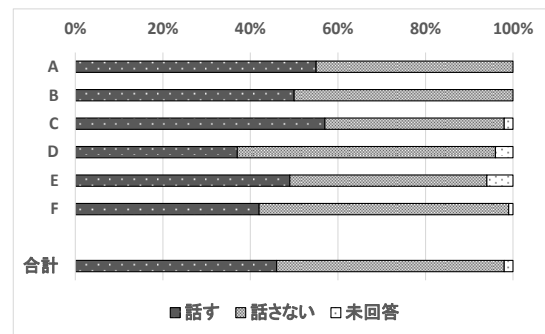


図 4 家庭での災害に関する話題の有無

Q、避難訓練にはどのような気持ちで取り組んでいるか (図 5)。

この項目では、学校で毎年行われる避難訓練に対してどのような気持ちを持っているかを素直に書いてもらった。「避難訓練にはどのような気持ちで取り組んでいるか？」との設問を設け自由記述としたが、集計の際に大きく、「ポジティブ」「ネガティブ」に回答を分けて集計した。全体として、8 割以上の児童が避難訓練に対してポジティブな気持ちを持つことが明らかになった。ただ、学校によってばらつきがみられ、ある学校ではネガティブな気持ちを持つ児童が 3 割以上という結果も得られた。

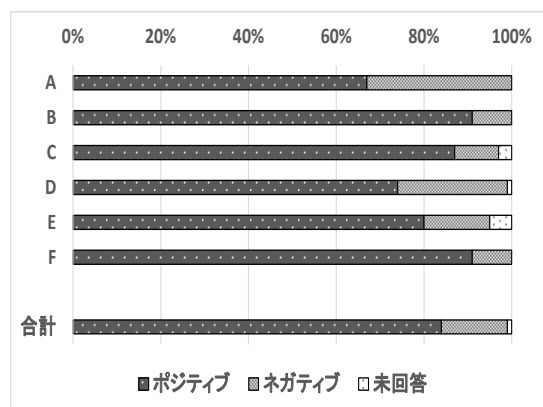


図 5 避難訓練への気持ち

Q、学校で洪水や地震、津波などの災害について学習をしたことがあるか (図 6)。

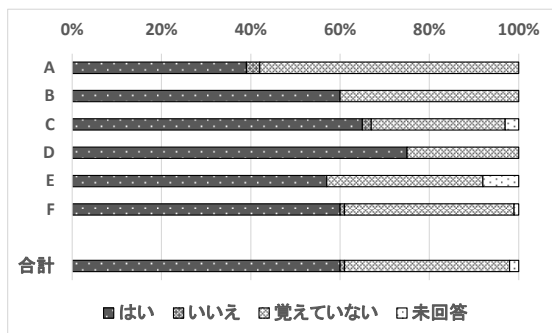


図6 防災教育を受けたことがあるかどうか

この項目は選択式とし、「はい」「いいえ」「覚えていない」の3つの選択肢から選んでもらった。多くの学校で約6割の児童が、覚えているの意味である「はい」を選択している。しかし、学校によっては覚えている児童が4割にとどまり、全体としても覚えていないと回答した児童が4割もいることが明らかになった。

Q, 防災教育は必要だと思うか (図7)。

この項目では理由と共に必要か不必要かを回答してもらった。各学校で大きな差は見られなかった。全体として約9割の児童が防災教育は必要だと回答している。1割弱の児童が不必要であると回答したわけであるが、一番多い理由として「学習したところで実際に災害が起きたときは役に立たないと思うから」が上がった。次いで、「つまらないから」が上がった。

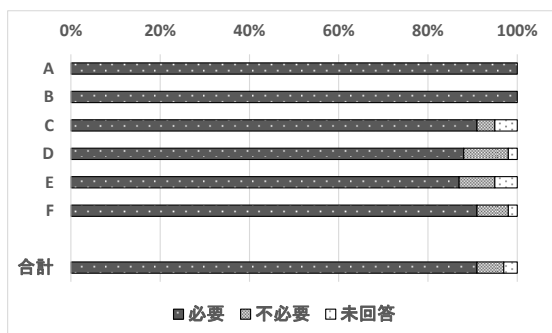


図7 防災教育の必要性

Q, 学校で教えてほしい防災教育内容はどのようなものか (図8)。

この項目では選択肢を12個用意し、学びたいと思う内容を3つ選んでもらった。集計の際、事前、事後、災害そのものの3つに分類し集計した。選択肢は以下のとおりである。

・事前...非常用の食べ物や道具について、家でできる防災の方法、災害に対して日ごろから気を付けておくこと

・事後...避難時での行動、災害が起きたときにまずやるべきこと、避難経路や避難場所、自然災害が起きたときに地域の安全な場所・危険な場所

・そのもの...自分が住む地域で起こりやすい災害について、洪水や地震などが起きる仕組み、過去の災害について、地域で行われている防災対策

結果は、事前の内容が24%、事後の内容が42%、災害その物についての内容が34%と、災害が起こった後のことを教えてほしいという児童が一番多いことが明らかになった。項目別にみていくと、教えてほしい内容の1位は自然災害が起きたときに地域の安全な場所・危険な場所、2位は自分が住む地域で起こりやすい災害について、3位は非常用の食べ物や道具についてという結果だった。

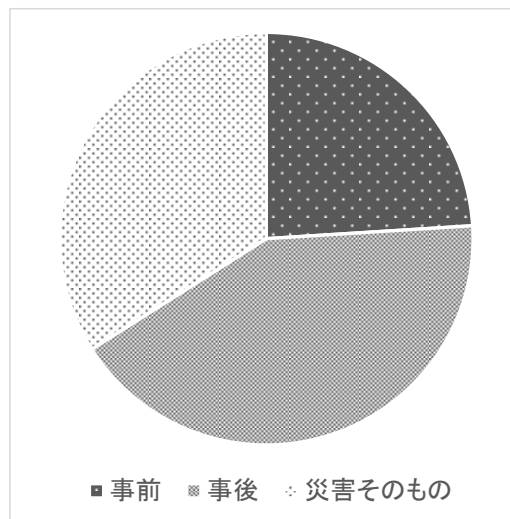


図8 学校の授業で教えてほしい内容

Q, 自分の住んでいる地域で起きる自然災害を知っているか (図9)。

この項目では、自分が住んでいる地域で起こるかもしれない災害をどれだけ知っているか自由記述で答えてもらった。どの学校でも地震と回答した児童が最も多くなっている。

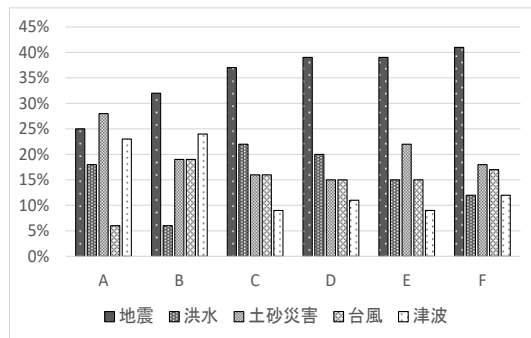


図9 児童の災害認知度

#### 4. 考察

主だった項目を取り上げ、アンケートの内容、災害が少ないという地域性、学校の認識と児童の意識との関連性についての考察を行っていく。

##### 4. 1. 児童の災害・防災認識

自分の住んでいる地域は、災害が起こりやすい地域だと思うかについて、どの学校の児童にも、起きやすい地域だと思うと回答した児童が10%ほど存在した。この児童の中にはアンケート項目にある、危険だと思う場所の項目に自宅付近との回答が目立つため、通学路や自宅など、生活環境が児童の認識に影響を与えていると考えられる。

家族で洪水や地震などの災害について話すことはあるかについては、全体として、話す児童が46%と半分を切った。家庭で災害について話題にすることは防災の面でも非常に重要であり、家庭で災害時の行動などを話し合っておくこと必要である。しかしこの結果からは、話していない児童が半分以上いることが明らかになった。

学校で洪水や地震、津波などの災害について学習をしたことがあるかについては、全体として覚えていないと回答した児童が約4割にのぼった。この数を減らすには、その土地柄にあっ

た内容と、体験型の授業を増やすなどの工夫が必要であり、児童に防災教育を印象付けていく必要がある。

防災教育は必要だと思うかについて、不必要な理由として、「役に立たない」「つまらない」が上がった。このことから分かるように、学校での防災教育が役に立たない、つまらないと児童が感じてしまうような内容になってしまっている可能性がある。内容を見直し「必要である」の回答が100%になるようにしたい。

学校で教えてほしい防災教育内容はどのような物かについては、1位は自然災害が起きたときに地域の安全な場所・危険な場所、2位は自分が住む地域で起こりやすい災害について、3位は非常用の食べ物や道具についてという結果だった。つまり、現状の学校教育の中でその地域の災害や防災についての教育が十分ではないということが考えられる。また、災害に出会にくい地域で、起きた後のことは実感しにくいはずである。家族で災害の話をする割合が低いことから分かるように、児童の身近な人も災害を経験しておらず、災害についての話を聞く機会が少ないことが予想される。そのため災害が起きてからのことが知りたいという児童が多くなったと考えられる。

自分の住んでいる地域で起きる自然災害を知っているかについては、どの学校でも地震と回答した児童が最も多くなった。これは、2016年に熊本地震が起きたことや、防災教育で扱われる内容が地震に偏っていることに影響していると考えられる。

#### 4. 1. 1. 防災教育と避難訓練の関係 (図 10)

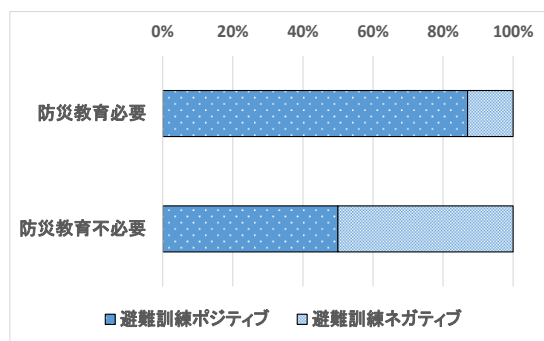


図 10 防災教育と避難訓練の必要性

児童へのアンケートで、防災教育が不必要だと考えている児童だけを集め、避難訓練に取り組む気持ちと共に集計したところ、避難訓練へ向かう気持ちに大きな差が出た。防災教育が不必要だと考えている児童は全体で1割程度いたが、そのうち、避難訓練に対しポジティブな気持ちを持っている生徒は50%にとどまる。しかし、防災教育が必要だと考えている生徒のうち、避難訓練に対しポジティブな気持ちを持っている生徒は87%と、37%の差が出た。防災教育が必要だと感じている児童のほとんどが、避難訓練に対してポジティブな気持ちを持っていることから、防災教育の印象が避難訓練へも影響していると考えられる。防災教育の必要性が感じられないから避難訓練も必要と感じられないという関係性が見られる。防災教育の内容を見直し、地域の特性に合わせ内容を工夫し児童が必要を感じられる内容にすることで、避難訓練に対する気持ちは変化・向上していくと考えられる。

#### 4. 1. 2. 防災教育と家庭での会話の関係性 (図 11)

防災教育の必要性についての項目と、家庭での災害についての会話の状況の項目をクロス集計した。

防災教育は必要だと回答した児童のうち、48%の児童が家庭で災害について会話をすると回答している。しかし、それに比べて防災教

育は不必要だと回答した児童のうち、家庭で災害について会話をすると回答した児童はわずか28%にとどまった。この結果から、防災教育への意識や必要性には、家庭で親と災害について会話をを行うかどうか大きく関わってきていると考えられる。家庭で災害についてなるべく話題に出すように心がけることで、児童の防災教育への意識が高まると考えられる。児童の防災教育への意識を高めるためには学校の働きかけだけではなく、家庭で災害について話題にすることもかなり有効だと考えられる。

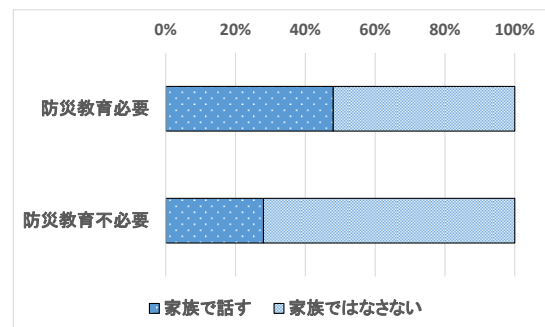


図 11 防災教育と家族との会話

#### 4. 2. 災害が少ない地域に住む児童の災害・防災認識

ここでは参考にした既往研究である、小舘・田中 (2011) と此松・中北 (2010) を基に地域性を比較し、災害の少なさの視点から考察を行う。

##### 4. 2. 1. 家庭での災害についての会話状況 (図 12)

この項目では地域によって結果に大きな差が出た。児童が直接的な被害を受けてはいないが、過去に大きな災害があり、災害を経験してきた札幌市と和歌山市の児童は、家庭で災害について話すことがあると答えた児童が約7割にものぼる。一方、災害が少ない地域である下関市の児童では、話すことがあると答えた児童は46%で、半分を切っており、札幌市の児童に比

べて20%以上少ない数になっている。この結果は、下関市の災害が少ないという地域性が顕著に表れていることが明らかになった。今回の調査では児童の親世代、さらにその上の世代へのアンケート調査を行えていないため推察になるが、災害が少なく過去にも大きな災害を経験していない下関市に住んでいるため、小学生の親世代の災害への認識も低く、家庭内でも話題になることが少ないと考えられる。家庭内での災害関連の会話には、災害の少なさによる災害経験の差が大きく関わっていると考えられ、災害が起きにくい地域性が関係していると考えられる。

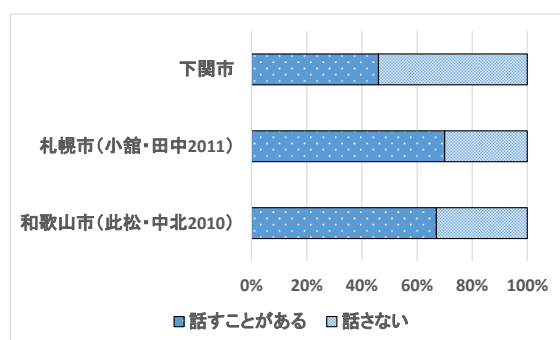


図12 家庭での会話状況についての地域比較

#### 4. 2. 2. 避難訓練へ取り組む気持ち (図13)

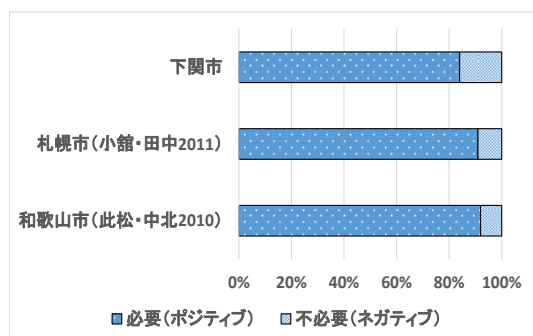


図13 避難訓練への気持ちについての地域比較

既往研究では、「学校で避難訓練は必要だと思うか？」との設問を設けているが、本調査では、「避難訓練にはどのような気持ちで取り組んでいるか？」との設問を設けた。多少、意味合いが異なってしまう点もあるが、今回は、避難訓練にポジティブな気持ちで取り組んでいる場合

を、避難訓練は必要だと捉え、ネガティブな気持ちで取り組んでいる場合を、避難訓練は不必要だと読み替え、比較を行った。

その結果、既往の2地域ではともに、必要であると回答した児童が9割を超える結果となった。それに比べ、下関市の児童では9割は越えず、84%の児童が避難訓練を大事だと感じていることが明らかになった。数値的には8割を超えているため、高い数値だが、比較対象の2地域に比べ、低い数値が得られた。このことから、避難訓練に対する意識にも、災害が少ない地域性が関係する可能性がある。加えて札幌市での調査では、その理由として、「受けても内容が意味の無いように思えるから」が1番の要因だが、本調査では、「災害が来ないから」の類の理由が多く得られた。このことから、災害が起きにくいという地域性が、避難訓練に対する意識に影響していると考えられる。

#### 4. 2. 3. 防災マップの認知状況 (図14)

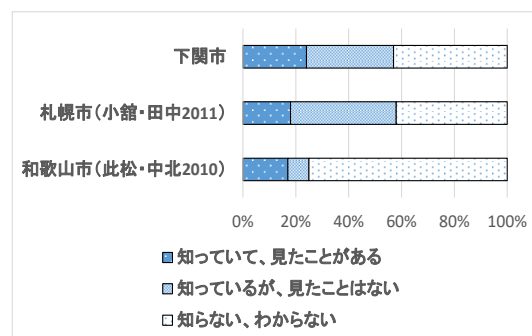


図14 防災マップの認知状況についての地域比較

札幌市の児童、和歌山市の児童はともに防災マップを知っていて見たことがある児童が2割に満たない数であるが、下関市の児童は24%と今回比較した二つの地域の児童に比べると高い数値が得られた。二つの地域に比べ「知っていて、見たことがある」の数値は高くなっているが、約2割の児童しか見たことがないという事実から、防災マップの認知度が高いとは言えない。しかし「知らない、わからない」と答えた児童が50%を切っており、見たこともないも含

めた、防災マップを知っていると答えた児童が50%以上になっている。

以上より、和歌山、札幌の結果に比べ高くなっていることが分かる。当初、災害が少ない地域である下関市のほうが防災マップの認知度は低くなると考えていたが、予想外の結果が得られた。ここから、災害の少ない地域だからと言って、児童の防災マップの認知度が低くなるとは考えにくい。

#### 4. 2. 4. 災害についての勉強（防災教育）は必要か（図 15）

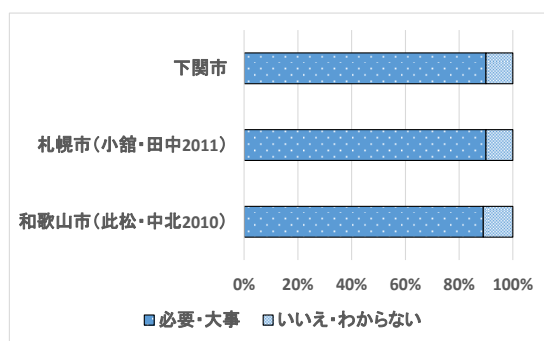


図 15 防災教育の必要性についての地域比較

結果は、多少のずれはあるが、どの地域の児童も約9割の児童が必要を感じているという結果が得られた。この項目で、地域差が見られないことから防災教育の必要性、重要性に関して、災害が少ないという地域性との関連はあまりなく、防災教育は必要だという共通認識がある。逆に、1割程度の児童で、防災教育は必要ないと認識しているという結果も得られた。一番多い理由は「学習したところで役に立たないと思う」からだった。次いで「つまらないから」である。

#### 4. 3. 学校の認識と児童の意識の関連性

ここでは、学校側の災害に対する認識と、児童の防災に関する意識を比較し、学校の認識の違いによって児童の意識がどう変化するかを考察した。特に差が見られた項目、特徴的な項目を取り上げる。

はじめに、児童が避難訓練に対し、どのような気持ちを持っているのかについてみると、全体として8割以上の児童が、避難訓練に対しポジティブな気持ちをもって取り組んでいることが明らかになった。しかし、学校によって差が見られる。避難訓練に対しポジティブな気持ちを持つ児童は、A小学校では67%、B小学校では91%、C小学校では87%、D小学校では74%、E小学校では80%、F小学校では91%と、A小学校で7割を切るという結果が得られた。要因を考えてみると、A小学校立地地域では斜面災害、高潮、津波、地震が想定されている。しかしA小学校の認識は「災害は想定されていない」との回答だった。一概には言えないかもしれないが、このことから、学校としての災害に対する意識は低いと考えられる。この学校側の認識の低さが児童にも影響し、災害・防災意識の低さが、避難訓練への気持ちとして現れたと考える。しかし、C小学校の学校側の認識としても、高潮、洪水、斜面災害が想定されるが「災害は想定されていない」と回答している一方で、児童の避難訓練に対する気持ちはポジティブな気持ちの児童が87%と高い値が得られた。同様のことが児童の防災マップの認知状況にも見られた。

このように、本調査では学校の認識と児童の認識には関連性も見られるが、一概に災害に対する意識が低いと思われる学校の児童も、防災に対する意識が低いとは言えない場合もあることが明らかになった。児童の防災意識にはおそらく、学校だけではなく、住んでいる地域や自治体の意識も関係していると考えられる。今後の課題として、自治体の意識も絡めた調査が必要である。

## 5. まとめと課題

### ○防災教育と避難訓練

学校で行われる防災教育の印象が、児童の避難訓練に対する意識へも影響しているといえる。よって、防災教育の内容の工夫が必要である。

### ○防災教育と家庭での災害の話題状況

防災教育が必要だと考えている児童のほうが、家庭で災害について会話しているということが明らかになった。よって、家庭教育の役割も児童の防災意識を高めるために重要である。

### ○災害が起きにくい地域性と児童の意識との関係

災害の少ない地域の児童は家庭内での災害に関する会話が少ない。加えて、避難訓練にむかう意識も低いことが明らかになった。また、教えてほしい内容として、災害が起きた後のことが多く、実感できない分事後への要望が多くなっている。このことから、災害の少ない地域性が児童の災害・防災意識に影響しているといえる。

しかし、災害が少ないことに関係なく児童は防災教育が必要だと考えている一面があることも分かり、防災教育の必要性に関しては、東日本大震災や熊本地震など、近年の大災害が影響していると言える。

### ○学校の認識と児童の意識

学校の認識と児童の認識には関連性も見られるが、一概に、防災に対する意識が低いと思われる学校の児童も防災に対する意識が低いとは言えないことが明らかになった。今回は地域住民へのアンケートは行えていないため、あくまで推察の域を出ないが、児童の防災意識にはおそらく、学校だけではなく、住んでいる地域も関係していると考えられる。

今回の課題として、保護者や自治体の意識も絡めた調査が行えなかったため、他の要因を絡めた考察ができなかった点が挙げられる。そのた

め、推察の域を出ないものがあったり、一概には言えないものが出てしまったりした。今後の課題として、それらを絡めた、より深い考察をしていかなければならない。

### 謝辞

本研究のためにアンケート調査にご協力いただいた下関市教育委員会、市内の小学校の校長・教頭・教諭及び児童の皆様には深く感謝いたします。

### 引用文献

此松昌彦・中北綾香（2010）：和歌山県北部の児童・生徒・学生に行った防災教育意識調査，和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，20号，133-142

小舘亮太・田中岳（2011）：札幌市内小学校における高学年を対象にした防災意識調査，土木学会北海道支部論文報告集，68号（CD-ROM），D-01

小舘亮太・田中岳（2012）：児童とその保護者を対象にした防災意識の相違－意識調査を取り入れた防災教育プログラムの実践－，土木学会論文集 F6（安全問題），68巻，2号，I\_181-I\_186  
中央防災会議（2003）：「防災に関する人材育成・活用専門調査会」

山口県企業立地ガイド

[www.kigyo-r.pref.yamaguchi.lg.jp/](http://www.kigyo-r.pref.yamaguchi.lg.jp/)（最終閲覧日 2018/02/15）

下関市 HP

[www.city.shimonoseki.lg.jp/](http://www.city.shimonoseki.lg.jp/)（最終閲覧日 2018/02/15）

しぜんさいがい ぼうさい かん ちようさ きょうりよく  
自然災害・防災に関するアンケート調査にご協力ください

ながのけん しんしゅうだいがくきょういくがくぶしゃかいきょういく  
長野県 信州大学教育学部社会科教育コース  
しぜん ちり がくけんきゅうしつ おおきのだかひろ  
自然地理学研究室3年 荻野貴大

このアンケートは、みなさんが<sup>す</sup>住んでいる<sup>ちいき</sup>地域で起こる<sup>お</sup>自然災害<sup>しぜんさいがい</sup>についてどう<sup>おも</sup>思っているの  
か、<sup>ぼうさい</sup>防災についての<sup>きょういく</sup>教育についてどう<sup>おも</sup>思っているのかを<sup>ちようさ</sup>調査するためのアンケートです。ア  
ンケートによって<sup>こじんじょうほう</sup>個人情報<sup>いっさい</sup>が<sup>ごきょうりよく</sup>もれることは<sup>おねがい</sup>一切ありません。ご協力<sup>おねがい</sup>よろしくお願いします。

じしん こた  
1. あなた自身についてお答えください

- ①性別 1. 男/2. 女  
②学年         年生

- ③家の中に<sup>いへ なか みず はい</sup>水が入るなどの<sup>こうすい か ぐ</sup>洪水や家具（<sup>れいぞうこ ほん</sup>たんす・冷蔵庫・本<sup>たお</sup>だなど）が<sup>おお</sup>倒れるほどの<sup>おお</sup>大き

な<sup>しぜんさいがい けいけん</sup>じしんなどの自然災害を経験したことがありますか

1. はい/2. いいえ

しぜんさいがい こうすい こた  
2. 自然災害（洪水やじしんなど）についてお答えください

- ①日本で<sup>にほん お</sup>起きやすい自然災害<sup>しぜんさいがい</sup>はどれくらい<sup>し</sup>知っていますか？知<sup>し</sup>っているものを<sup>ぜんぶ あ</sup>全部<sup>ぜんぶ あ</sup>挙げてく  
ださい

- ②自分の<sup>じぶん す</sup>住んでいる<sup>ちいき</sup>地域は、<sup>さいがい お</sup>災害が起きやすい<sup>ちいき おも</sup>地域だと思<sup>おも</sup>いますか？

1. はい/2. いいえ

- ②自分の<sup>じぶん す</sup>住んでいる<sup>ちいき お</sup>地域で起きるかもしれない自然災害<sup>しぜんさいがい</sup>（例：<sup>れい</sup>洪水<sup>こうすい</sup>、<sup>なに</sup>じしん）は何<sup>なに</sup>がありま  
すか？

- ③登下校の<sup>とうげこう あいだ</sup>間（自分の<sup>じぶん み</sup>身のまわり）で<sup>きけん おも</sup>危険だと思<sup>おも</sup>うところがありますか？あるとしたらそれ

はどのようなところですか？

---

④ ③で、「危険だと思うところがある」と考 え、場所を書いてくれた人に聞きます。

どういう理由で、③で書いてくれた場所は危険だと考 えたのですか？

---

### 3. 家庭での防災についてお答えください

①防災マップを知っていますか

1. 知っているし、見たことがある／2. 知っているが、見たことはない／3. 知らない

知っていると答えた人へ

どんな種類の防災マップを知っていますか？

---

⑤家族で洪水やじしんなどの災害について話すことはありますか

1. はい／2. いいえ

### 4. 学校での防災についてお答えください

①正 直に教えてください！ひなん訓練にはどのような気持ち取り組んでいますか

---

② ①で答えたような気持ちで取り組んでいるのはなぜですか？

---

③学校で洪水やじしん、津波などの災害についての学 習をしたことがありますか

1. はい／2. いいえ／3. 覚えていない

1. はいと答えた人へ どのようなことを学 習しましたか？

---

④ ③のような、<sup>さいがい</sup>災害についての<sup>がくしゅう</sup>学<sup>ひつよう</sup>習は必要だと思ひますか？ 1. はい／2. いいえ

1. はいと答えた人へ <sup>ひと</sup>どうして必要だと思ひますか？

2. いいえと答えた人へ <sup>ひつよう</sup>必要だと思わない理由を教えてください

1. <sup>さいがい</sup>災害が起きるとは思わないから／2. <sup>おも</sup>つまらないから／3. <sup>じぶん</sup>自分で<sup>がくしゅう</sup>学<sup>おし</sup>習できるから／

4. <sup>がくしゅう</sup>学<sup>じっさい</sup>習したところで<sup>さいがい</sup>実際に災害が起きたときは<sup>やく</sup>役に立たないと思ひから／

5. その他（ ）

⑤ <sup>がっこう</sup>学校で<sup>おし</sup>教えてほしい<sup>ぼうさいないよう</sup>防災内容はどのようなものですか？（3つまでえらんでください）

<sup>こうすい</sup> ・洪水や <sup>お</sup> じしんなどが起 <sup>しく</sup> きる仕組み	<sup>じぶん</sup> ・自分が <sup>す</sup> 住む <sup>ちいき</sup> 地域で <sup>お</sup> 起こりやすい <sup>さいがい</sup> 災害について	<sup>けいろ</sup> ・ひなん経路やひなん <sup>ばしょ</sup> 場所
<sup>しぜんさいがい</sup> ・自然災害が起きたとき、 <sup>ちいき</sup> 地域の <sup>あんぜん</sup> 安全な <sup>ばしょ</sup> 場所、 <sup>きけん</sup> 危険な <sup>ばしょ</sup> 場所	<sup>さいがい</sup> ・災害に対して <sup>たい</sup> 日ごろから <sup>ひ</sup> 気を <sup>き</sup> 付 <sup>つ</sup> <sup>お</sup> けておくこと	<sup>じょ</sup> ・ひなん所での <sup>こうどう</sup> 行動
<sup>ちいき</sup> ・地域で <sup>おこな</sup> 行われている <sup>ぼうさいたいさく</sup> 防災対策	<sup>ひじょうよう</sup> ・非常用の <sup>た</sup> 食べ物や <sup>ぶつ</sup> 道具について <sup>どうぐ</sup> 	<sup>か</sup> ・過去の <sup>こ</sup> 災害について <sup>さいがい</sup>
<sup>さいがい</sup> ・災害が起きたときにま <sup>お</sup> ずやるべきこと	<sup>いえ</sup> ・家でできる <sup>ぼうさい</sup> 防災の <sup>ほうほう</sup> 方法（ <sup>か</sup> 家具が <sup>たお</sup> 倒れないように <sup>ほうほう</sup> する方法など）	<sup>た</sup> ・その他 （ ）

## V. おわりに

このアンケートに<sup>かいとう</sup>回答して、<sup>かん</sup>感じたこと、<sup>おも</sup>思ったことなどを<sup>じゆう か</sup>自由に書いてください

<sup>いじょう</sup>以上でアンケートは<sup>しゅうりょう</sup>終了です。ありがとうございました！